

主 題：主を待ち望むことのすばらしさ

聖書箇所：詩篇40篇

テーマ：主を待ち望むことのすばらしさを知っていた人物の姿から学ぶ

今朝、皆さんとともに見て学びたいみことばは、詩篇40篇です。「皆さん、いよいよ終わりが見えてきました。」と言っても、もちろん詩篇全体の終わりではありません。詩篇150篇までたどり着くのはまだまだ先の話です。でも、150篇からなるこの詩篇は、大きく分けて五つの巻で構成されていますが、そのうちの最初の一巻を私たちは今週と来週で終えようとしています。来月からはクリスマスのシリーズとして詩篇を中断して、イエス・キリストの誕生に関連することを一緒に考えていければと思います。

これまで私たちは詩篇を通して数多くのことを学んできました。愛する神様の偉大さや、私たち人間の罪深さ、賛美することや、祈ることなど、ひとりひとりの歩みにとって欠かせない真理を、特にダビデの姿を通してたくさん教えられてきたのです。ある人は詩篇を「信仰者の歩みについての百科事典だ」と表してもいます。まさにその通りかもしれません。きょう見るこの詩篇40篇も、私たちみなの間かなければならない神様からの大切な教えを明らかにしてくれています。ですから、一緒によく耳を傾けてみましょう。まず、いつものようにみことばをお読みします。

詩篇40篇 指揮者のために。ダビデの賛歌

「:1 私は切なる思いで【主】を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びを聞き、:2 私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた。:3 主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、【主】に信頼しよう。:4 幸いなことよ。【主】に信頼し、高ぶる者や、偽りに陥る者たちのほうに向かなかつた、その人は。:5 わが神、【主】よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。:6 あなたは、いけにえや穀物のささげ物をお喜びにはなりません。あなたは私の耳を開いてくださいました。あなたは、全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、お求めになりませんでした。:7 そのとき私は申しました。「今、私はここにきております。巻き物の書に私のことが書いてあります。:8 わが神。私はみこころを行うことを喜びとします。あなたの教えは私の心のうちにあります。」:9 私は大きな会衆の中で、義の良い知らせを告げました。ご覧ください。私は私のくちびるを押さえません。【主】よ。あなたはご存じです。:10 私は、あなたの義を心の中に隠しません。あなたの真実とあなたの救いを告げました。私は、あなたの恵みとあなたのまことを大いなる会衆に隠しません。:11 あなたは、【主】よ。私にあわれみを惜しまないでください。あなたの恵みと、あなたのまことが、絶えず私を見守るようにしてください。:12 数えきれないほどのわざわいが私を取り囲み、私の咎が私に追いついたので、私は見ることもできません。それは私の髪の毛よりも多く、私の心も私を見捨てました。:13 【主】よ。どうかみこころによって私を救い出してください。【主】よ。急いで、私を助けてください。:14 私のいのちを求め、滅ぼそうとする者どもが、みな恥を見、はずかしめを受けますように。私のわざわいを喜ぶ者どもが退き、卑しめられますように。:15 私を「あはは。」とあざ笑う者どもが、おのれの恥のために、色を失いますように。:16 あなたを慕い求める人がみな、あなたにあって楽しみ、喜びますように。あなたの救いを愛する人たちが、「【主】をあがめよう。」と、いつも言いますように。:17 私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。」

「主を待ち望むこと」これは私たちにとって欠かせない態度です。みことばも繰り返し、忍耐を持って主を待つことの大切さを教えていました。たとえば、詩篇130：5-7を見ると、そこには「5 私は【主】を待ち望みます。私のたましいは、待ち望みます。私は主のみことばを待ちます。6 私のたましいは、夜回りが夜明けを待つのにまさり、まことに、夜回りが夜明けを待つのにまさって、主を待ちます。7 イスラエルよ。【主】を待て。【主】には恵みがあり、豊かな贖いがある。」と記されています。また哀歌3：25-26を見ても、そこにも「25 【主】はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。26 【主】の救いを黙って待つのは良い。」と記されています。そしてこれは当時も今も変わりません。私たちはこの世での歩みの中であって、いろいろな問題や困難に直面するときが必ずあります。しかし、たとえどんなに難しい状況に置かれたとしても、恵み深くいつくしみ深い主に信頼して待つことができるというのは、私たちに与えられた揺るがない確信であり、また希望でした。「自分には起きていることがわからない。けれど、すべてを支配しておられる正しい主権者にゆだねることができる。」この真理は私たちがいつも慰めや平安を見出すことのできるすばらしいものです。偉大な主を覚えて、その方の働きを黙って待てるということは、私たちにとって確かにすばらしいことです。でも同時に、この「待ち望む」ということほど、私たちにとって難しさを覚えるものもないかもしれません。この先何が起こるのかわからないという不安、もしかしたら何も起こらないかもしれないという恐れ、そういったものは私たちの心を思い悩ませることがあります。そのような不安や恐れが生じれば、一日中そのことに思いがとらわれ、次第に、「ただ待っている」ことに対する疑いが生じてくるかもしれません。そんな思いを抱いたことはありません？私たちは「ただ待っている」ことに無力さを覚えることがあります。主を待つことのすばらしさを知っていたとしても、あまりにも状況が変わらなければ、すべてゆだねて待つよりも、自分でどうにかしようとすることがあるのです。何が起きているのかその答えを今知りたい、なぜこんな苦しみに自分が合っているのかその理由や目的を今すぐに知りたい、と願ったりします。こうして私たちは自分の望むタイミングで自分の望むことが起きなければ、すぐに忍耐を失って諦めたり失望してしまうことがあります。そんな弱さを私たちはみな持っているのです。私たちにとって、主を待ち望むことはすばらしいことです。そのすばらしさはこの後も見ていきます。でも私たちが知っているのは、そこには難しさもあるということです。では一体どうすればこの点において揺るがされることなく、いつも忍耐を持って歩む者へと成長できるのでしょうか？その助けは、もちろんみことばが与えてくれていました。

きょう私たちが見るこの詩篇40篇は、表題にもあるようにダビデによって記されましたが、考えてみれば、「彼ほど主を待ち望んでいた人物もいなかった。」と言っても過言ではないかもしれません。これまでに学んできた詩篇の中でも、彼はそのことを繰り返し口にしていました。たとえば詩篇27篇でもダビデはそのことを教えていました。27：14を見ると「待ち望め。【主】を。雄々しくあれ、心を強くせよ。待ち望め【主】を。」またそれに加えてここ最近私たちが見てきた詩篇37-39篇でも、彼は繰り返し、主を待ち望むことを訴えていました。ダビデが人生を通して身に付けた知恵、それを学んだ37篇にも、7節にこうあります。「【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待って。」また34節にも「【主】を待ち望め。その道を守れ」とあります。また、自分の罪が原因で主の懲らしめを受けてひどい苦痛の中にいたダビデの姿を学んだ詩篇の38：15でも「それは、【主】よ、私があなを待ち望んでいるからです。わが神、主よ。あなたが答えてくださいますように。」また39：7にも「主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。」このように繰り返しされていました。そしてきょう私たちが見るこの詩篇40篇の最初と最後のところでも、彼はこう言うのです。1節の初めにこう書いています。「私は切なる思いで【主】を待ち望んだ。」そして17節でも「私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。」と。ですから間違いなく、ダビデは困難の中で忍耐を持って主を待ち望むということを実践していた人物でした。そのこ

との難しさも知っていた人物でした。彼は祈っても、祈ってもすぐに答えが得られないということの葛藤も知っていた人物でした。けれど同時に彼は、待ち望む者に主は誠実に答えてくださるということのすばらしさも、知っていた人物でした。この詩篇40篇を通して、ダビデは主を待ち望むことのすばらしさを知った者の歩みを、自身の模範を通して教えてくれています。特に、私たちはダビデのうちに三つの模範を見て取ることができます。主を待ち望むことのすばらしさを知った人物の歩みです。ですからその模範の一つ一つをともに考えてみましょう。このみことばを通して、私たちが主を待ち望むということのすばらしさをますます知って、そしていつも忍耐を持って歩む者へと成長する、その励ましになることを心から願っています。

○主を待ち望むこと：ダビデの示した模範

1. 過去の主の働きを思い返すこと 1-3a 節

最初の模範を1-3節の前半に見て取ることができます。一つ目は「過去の主の働きを思い返すこと」でした。ダビデは、かつて自分が経験した出来事に心を留めているのです。このように1節は始まっています。「私は切なる思いで【主】を待ち望んだ。」ある時、ダビデは苦しみの中で主の応答を待ち続けていました。彼は切なる思いで、主が自分の祈りを聞き入れてくださることを求めていたのです。ここで用いられていた「待ち望んだ」ということばには、「何かが起こると確信して待つこと」であったり「何かが起こると期待して信頼すること」といった意味が含まれています。言い換えれば、ダビデは苦しみの中にあって何か起こるかとはポーと待っていたのではなく、「主は自分に必ず答えてくださる」と絶え間なく、熱心に、期待しながら待ち続けていたということです。ダビデは熱心に待っていました。そしてそんな祈りに対して、神様は答えられました。主は彼の助けを求めるその叫びに耳を傾けて、彼を苦難の中から引き上げられたのです。1節の続きから2節にこう書いています。「:1 …主は、私のほうに身を傾け、私の叫びを聞き、:2 私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた。」実際にどのような困難にダビデがあっていたのかはよくわかりません。もしかすれば、それは肉体的な苦しみだったのかもしれませんが。私たちもよく知っている通り、ダビデという人物は、数多くの敵からいのちを狙われて傷つけられることもあれば、大病を患って床に伏せることもありました。彼のからだはそのようにひどい苦痛を覚えることが多くあったのです。でも、もしかしたらそんな肉体的な苦しみではなくて、精神的、霊的な苦しみだったのかもしれませんが。前回見た詩篇38篇や39篇でもあったように、彼は自分自身の罪が原因で主の懲らしめを受けて、死が間近に迫るほど弱り果てることもありました。ですから、これが肉体的な苦しみだったのか、精神的な苦しみだったのか、どんな苦しみだったのかは私たちにはわかりません。でも、肉体的なものであろうと精神的なものであろうとどのようなものであろうとも、彼の置かれていた状況は間違いなく最悪のものでした。そのことはここで使われている「泥沼」ということばを考えてみても、私たちは彼の苦しみを容易に思い浮かべることができます。2節に「泥沼」ということばが出てきました。皆さんは泥沼、流砂にはまってしまった人や動物の様子をテレビやYouTubeなどでご覧になったことがあるでしょうか？泥沼にはまってしまったものは、そこから何とかして脱出しようともがきます。でも、焦って、もがけばもがくほど足が泥につかまって、そこから抜け出せなくなってしまふのです。そしてそのまま完全にはまり込んでしまえば、もう自力で脱出することがかなわなくなってしまふのです。一例として、アメリカでも男性が12時間泥にはまってしまったという事故がありました。また聖書を考えても、思い返せば、あの預言者エレミヤが、彼を憎む者たちの手によってそのような泥沼に放り込まれることがありました。その様子がエレミヤ書38章にこのように描かれています。エレミヤ38:6「そこで彼らはエレミヤを捕らえ、監視の庭にある王子マルキアの穴に投げ込んだ。彼らはエレミヤを綱で降ろしたが、穴の中には水がなくて泥があったので、エレミヤは泥の中に沈んだ。」エレミヤに悪を働いた人たちは、彼が泥

の中に沈んで自力で抜け出すことができなくなって、そのまま次第に餓死していくことを目論んでいました。泥沼というのはそのような危険が伴うものだったのです。

この詩篇40篇で、おそらくダビデは実際の泥沼にはまっていたわけではなかったでしょう。でも彼はそんな泥沼にはまってしまった者のように、周りを苦しみに取り囲まれて、もう自力では抜け出せないほど弱り果てていたのです。ひどい苦難に押しつぶされて今にも滅んで死んでしまいそうなそんな希望の見えない状況に置かれていました。ダビデ自身には、もうどうすることもできない状態だったのです。しかしそのような中で、ダビデは変わらず祈り続けていました。彼は変わらず主を待ち望み続けていたのです。彼が待つことに疲れてしまうことはありませんでした。期待して祈っているその中にあって、すぐに自分の思い通りにならない、自分の思いどおりの結果が見られないと言って諦めてしまうこともありませんでした。

私たちの祈りは、果たして彼のようなものでしょうか？私たちの祈りは、困難の中にあるときに忍耐を持って祈り続ける祈りでしょうか？それとも、すぐに諦めて失望を抱いてしまうようなものでしょうか？よく考えてみてください。果たして私たちは、置かれているその状況と、置かれている状況から助け出すことのできるお方と、どちらに心を留め続けているのでしょうか？ダビデは確実に自分の神様をよく知っていました。彼は、自分の力ではどうしようもできないような状況にあらうと、神様には自分を助け出すことができると、信じて疑うことはありませんでした。だからこそ、待ち望むことを止めることがなかったのです。そしてそんな彼の祈りを主は聞き入れられました。絶望的な状況から彼を助け出して、主は彼の歩みを確かなものとされました。人の目には一切希望など見出せないようなひどい困難な状況の中にあらうとも、神様には助け出すことのできる力がありませんでした。

そして、これは今の私たちも覚えることができます。私たちの祈りを聞いてくださる神様は、私たちのような力に限りのある存在ではありません。このお方は、この世界のすべてを、ことばだけで創造された力ある存在です。私たちにはどうすることもできない問題であらうとも、この方にとって難し過ぎる手に負えない問題などは、一切ないのです。皆さん、私たちはそのような神様に向かって祈ることができます。そのような神様に向かって、私たちはすべてをゆだねることができます。その神様が働いてくださると、応答を待ち続けることができるのです。ダビデはその神様に向かって祈っていました。そして、その神様はダビデに答えて助けを与えられました。

では、神様に助け出されたときに、ダビデはどのようにして神様に応答したのでしょうか？そのようにして神様からあわれみを受けたダビデは、一体何をしたのでしょうか？このように3節に記されています。「主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。」彼がしたこと、それは、自分を助け出してくださった方に対して賛美をささげることでした。彼は、自分にはどうすることもできない状況から救い出してくださったその主を見上げ、ただ心からの感謝をささげていたのです。これこそが神様の偉大な働きを味わった者、目の当たりにした者がとるべきふさわしい応答でした。ダビデはこうして、過去に働かれたその主の姿を思い返していました。自分が待ち望む主のうちには、どんな状況にあらうと助け出すことのできる力があることを思い出していました。そして、そのすばらしい主の力に彼は感謝をささげていたのです。これが一つ目の模範でした。

2. 変わらない主のご性質に思いを巡らせること 3b—10節

続けて二つ目に見てとれる模範は、「変わらない主のご性質に思いを巡らせること」です。ダビデは過去の主の働きを思い返して、そのすばらしさに賛美をささげていただけでなく、主のすばらしいご性質というものを忘れることはありませんでした。自分を助け出してくださったその方のすばらしさをいつも心に留め続けていました。そしてそのことに心を留めていた彼は、特に3—10節の間で二つのことを行っていました。一つは、すばらしいその主を人々の前でほめたたえること、そしてもう一つは、すばらしいその主に心から従うことでした。それぞれ少し考えてみましょう。

a) すばらしい主を人々の前でほめたたえること 3b—5 ; 9—10節

まず一つ目は「すばらしい主を人々の前でほめたたえること」でした。特に3節の後半部分に注目しながら読むと、3節「主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、【主】に信頼しよう。」と。先ほど見たように、ダビデは自分を助け出してくださったその神様に心からの感謝をささげていました。彼は、神様のすばらしいみわざをまた新たに目にしたこと、心を新たにして賛美をささげていたのです。神様に信頼し続けるということが自分にとって最高の喜びである、と彼はわかっていました。でも同時に、その喜びというのは、彼のうちのみ留まっているものでもなかったのです。ダビデの賛美は、彼のうちにのみ留まっているものではありませんでした。彼は喜びにあふれていたからこそ、人々の前でも賛美をすることで、それを見た人々も同じように主に信頼できるようにと導いていました。どんなときも信頼することができるこのすばらしい主を、もちろん自分は知っているけれど、でも、ほかの人も同じように恐れて信頼できるように、と励ましていたのです。そして、そのテーマは4—5節にもこう続いていきます。4節から見ていただくと「:4 幸いなことよ。

【主】に信頼し、高ぶる者や、偽りに陥る者たちのほうに向かなかつた、その人は。:5 わが神、【主】よ。あなたがなされた奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。」と。ダビデは、主に信頼して歩むことが、いかに人にとって幸いなことなのかを覚えていました。彼が神様の偉大さというものを覚えるときに、その方を忘れ去って、自分の力や知恵、ほかの何か頼りとするものなどがいかに虚しくて間違っているのかを覚えていました。だから彼は5節でもはっきりと述べるのです。「わが神、【主】よ。あなたがなされた奇しいわざと」と。神様のかつて成された奇しいみわざというのは、どれを取っても人には決して測り知ることのできない壮大なものなのだ。また、「私たちへの御計りは、数も知れず」と。私たちに対する主のご計画や考えは、だれにも数えることができないほど想像をはるかに超えたすばらしいものなのだ。

ダビデは神様がかつて成された奇しいみわざ、また人に対しての御計りの偉大さ、そのすばらしさというものをよくわかっていました。もちろん、主の知恵やご計画に関しては、別のみことばにもそのすばらしさを見て取ることができます。たとえばイザヤ55 : 8—9には「:8 わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。—【主】の御告げ— :9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」また、旧約聖書だけではなくて、新約聖書を見ても、ローマ11 : 33—36でパウロはこのように言っています。「:33 ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。:34 なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。:35 また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。:36 というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」と。

皆さん、私たちは自分自身に、よく、みことばの真理を思い出させ続ける必要があります。たとえば、一体だれがすべてのことを計画しておられるのか、一体だれがその計画に従うべきなのか、そのことを私たちは思い出し続ける必要があります。でも私たちは時にそのことを忘れてしまうことがあるのです。すべてのことを計画しておられるのは神様なのに、でも、私たちが自分で自分のことを計画しているかのようにふるまっていることがあります。神様がすべてのことを計画されていてその計画に私たちが従うべきなのに、まるで私たちがその計画に従う必要がないかのようにふるまっていることがあります。そして、そんな場面で私たちは不平不満を抱いたり、自分の置かれている状況や周りの人のことでつぶやいたりすることがあるのです。私たちは容易に、みことばが教えているその神様の姿よりも、自分の状況を通して神様を見てしまうことがあります。そして、神様は自分の状況を覚えておられないと疑いを抱いたり、怒りを覚えたりするのです。でも、私たちはいつも覚えることができます。たとえ

私たちが理解できないことであろうとも、神様は私たちに心を留めていてくださって、そして、すべてのことをご自身の栄光のために必ず成し遂げられる、ということです。みことばにそう書いていました。「すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。」と。そのことに私たちは確信を置くことができます。神様のはかりごとなど、私たちの限られた頭で到底理解できるものではありません。でも、たとえ自分たちの頭では理由や目的がわからなかったとしても、その状況を支配しておられる神様のご計画に私たちは信頼して、「必ずこの方は栄光のために成される。」と、ほめたたえることができるのです。ダビデはそのような神様の測り知ることのできない偉大な知恵を喜んでいました。

また彼はそうして自分自身が喜んでいただけではなく、そのことを人々にも伝えようとしたのです。主のご性質というものも同じように大胆に語り告げようとしていました。彼は続く9-10節でもこのように述べています。「:9 私は大きな会衆の中で、義の良い知らせを告げました。ご覧ください。私は私のくちびるを押えません。【主】よ。あなたはご存じです。:10 私は、あなたの義を心の中に隠しませんでした。あなたの真実とあなたの救いを告げました。私は、あなたの恵みとあなたのみことを大いなる会衆に隠しませんでした。」と。ダビデはここで、「主の義を会衆の前で告げたのだ。」と口にしていました。彼はそのことを隠すことがありませんでした。むしろ、神様の義を神様のすばらしさを会衆の前で人々に述べ伝えたい、と願う思いがあまりにも強かったので、その口を押さえておくことができませんでした。

ここで用いられていた特に9節の「良い知らせを告げ」ということばには、「喜びの知らせをもたらす」とか「それを語る」という意味があります。喜びの知らせをもたらすのです。皆さん多分思いついておられるでしょう。このことばは新約聖書で「良い知らせ」「福音」として用いられることばの前身と考えられてもいますが、まさにその通りでしょう。御使いが羊飼いに、「救い主の誕生」という良い知らせを伝えたように、ダビデは人々に、「主の義とその救いの知らせ」を大胆にもたらしていたのです。そしてこれは非常に大切なポイントでした。ダビデは自分一人が主を待ち望んで、そのすばらしさを味わってそれでよしとはしませんでした。そのすばらしさを味わったことで、彼は自分だけが感謝して終わり、ともしていませんでした。彼はほかの人にもその良い知らせを伝えようとしたのです。自分にはどうすることもできない状況から神様が救い出してくださったのだ、というその最高の知らせを、最高の喜びを、彼は黙っていることができませんでした。ダビデは絶望からの神様の救い、その福音を人々の前で明らかにしました。

そして、これは私たちにとっても大切なこととなります。もちろん、私たちはさまざまな日々の苦しみから、神様が助け出してくださったということをお人々に分かち合うことができます。苦難の中で祈りを聞き入れてくださった、自分をあわれんでくださったその神様の偉大さというものを述べ伝えて感謝することもできます。でも皆さん、私たちが絶対に隠しておくことができない最高の知らせ、それは、神様がキリストを通して罪人を救われるという「福音」です。信じるすべての人に救いを得させる力を持つその「福音」こそ、私たちにとって黙ってなどいられない、私たちにとって最高の喜びの知らせでした。みことばは私たちにはっきりと教えているのです。ここにいる人はみな例外なく、自分の罪と罪過のゆえにかつて死んでいた者だったと。よく私たちも知っていますが、エペソ2:1-3に「:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながらに御怒りを受けるべき子らでした。」本来であれば、創造主なる神様によって、この方に従ってその栄光を現す者として造られた私たちひとりひとり。しかしそんな私たちは、生まれながらに神様に逆らって、みな自分の心の望むままを生きるようになりました。だれ一人として神様を求めようともせず、好きなように生きることが何の問題もないと考えていたのです。そのようにして聖い神様に頑なに逆らって、忌み嫌われる罪を積み重ねてきました。だからこそ、そんな罪人であ

る私たちはみな、その罪ゆえに、ただ神様の御怒りを受けてさばかれて当然の存在でした。罪ゆえに永遠に神様から引き離されて滅んでしかるべき存在だったのです。そして、そんな私たちは罪の中に死んでいたからこそ、自分の力でその状況をどうにかすることなど到底できなかったのです。まさに私たちは、自分の力では一切何もすることができない「泥沼」にいました。しかし、そんな私たちに対して、神様がその大きな愛のゆえに救いを与えてくださいました。罪の中に死んでいた私たちに、神様がいのちを与えてくださったのです。先の続きにこう書いています。エペソ2：4-5に「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、—あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。—」と。だれ一人として主の慰めやあわれみを求める資格などありませんでした。しかし、そんな者のために神の御子であるイエス・キリストが人としてこの地上に来てくださり、私たちの罪を負って十字架にかかってくださいました。この方が身代わりとなって死んで三日目によみがえられたからこそ、この偉大な救いのみわざを通して、神様はご自分のもとに悔い改めと信仰を持ってやって来る者に罪の赦しを与える、と約束してくださったのです。こうしていのちの源であるキリストを信じ受け入れた者に、この方であって、神様はいのちを与えてくださいました。もし、まだこのイエス・キリスト個人的な救い主として知らない方がおられるなら、この福音を自分のものとされていない方がおられるのならば、どうかきょうというこの日にこの主を信じ受け入れてください。あなたの永遠に関わる問題です。どうか、あわれみ深い神様の前に、そのあわれみを求めて出てください。

兄弟姉妹の皆さん、何の希望もなく死んでいた私たちは、神様の偉大な力によって永遠のいのちを持つ者とされました。ダビデは良い知らせを語り続けていました。でも、ダビデ以上に私たちもこのすばらしい知らせ「福音」を宣べ伝える責任を負っています。私たちは黙ってなどいられないのです。このような罪人が神様によって救われるという最高の知らせを、まだそれを知らない人に私たちも大胆に伝えていくことが大切になるのです。ダビデはそのことをしていました。

b) すばらしい主に心から従うこと 6-8節

また二つ目にダビデがしていたことを6-8節のうちに見て取ることができます。それは、「すばらしい主に心から従うこと」でした。6節にこのように記されています。「あなたは、いけにえや穀物のささげ物をお喜びにはなりません。あなたは私の耳を開いて下さいました。あなたは、全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、お求めにはなりません。」気付かれたかと思いますが、ダビデはここで「いけにえ」に関して異なる四つのことばを用いていました。そして「神様はそれらのものを望まれていない。」と口にしました。でも、一体どうしてなのでしょう？私たちが旧約聖書を見れば、あらゆるところでいけにえをささげることが求められていることを見て取ることができます。レビ記などはまさにそうでしょう。全焼のいけにえに関しても、罪のためのいけにえにしても、神様が人々に求められていたことでした。ではなぜ、神様はそのようないけにえを喜ばれないのでしょうか？それは、どんないけにえをささげていたとしても、もしそこに心が伴っていなければ、すべてが無意味なもの、だからでした。かつてイエス様もパリサイ人や律法学者たちに向かって、イザヤ書のことばを引用してこのように述べておられました。マタイ15：8-9「:8 『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。:9 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』」と。イエス様の基準は明白でした。どれだけ口先やふるまいだけ繕っていたとしても、心が伴っていなければ意味をなさないと。心からのものでなければ全くの無駄なものなのだ。でも逆に、詩篇51：17ではこうあります。「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」神様は、砕かれた心を伴う喜んでささげる者を、喜ばれるお方でした。

では果たして、私たちは本当にこのみことばを信じているのでしょうか？私たちは人々の目であれば容易にごまかすことができます。動機が正しいものでなかろうとも、全く心が伴ってなかったとしても、私たちは、形だけは周りの人が見て、喜ばれたり、尊敬されるに値するようなことをすることはできません。でも、神様の目は決してごまかすことはできません。この方は私たちの心をご覧になれる方でした。そしてもし、私たちが今ささげている礼拝も賛美も心からのものでないのだとしたら、それは全くもって主の前に無意味だということです。そうだとすれば、今私たちの心には何があるでしょうか？私たちは横の人を気にする必要はありません。私たちが気にすべきなのは、神様です。神様に対する感謝や喜びがあるでしょうか？それとも何か別のものに心がとらわれていないでしょうか？もしそうなら、主の前に正直に告白して悔い改めて、まず正しい態度を持って主を礼拝することです。聖く正しい神様は、心の伴ったささげる者を喜ばれるお方でした。

また6節に戻っていただいて、この6節に出てきていた「あなたは私の耳を開いてくださいました。」というのも同じことです。ここで「耳」と出てきました。この「耳」というのは単に何かを聞くだけではなくて、「その人自身が実際に耳にしたことに従って生きること」を意味していました。耳にしたことを実際に生きることです。つまりダビデはここでも、形だけではなくて、聞いたことを心から神様に従っていくことを求めていたということです。またこの点に関しては、ダビデは7—8節でもこう説明を付け加えています。7節から「:7 そのとき私は申しました。「今、私はここに来ております。巻き物の書に私のことが書いてあります。:8 わが神。私はみこころを行うことを喜びとします。あなたのおしえは、私の心のうちにあります。」」ダビデは形だけの空っぽないけにえをささげようとはしていませんでした。主がそれをよしとはなさらないこと、喜ばれないことを知っていたからこそ、心からへりくだって仕えることを求めていたのです。ダビデは神様のみこころに従うこと、みこころを行うことを喜びとしていました。ダビデは神様のみことばに従うことをおのれの喜びとしていました。まさにダビデは、神様が喜ばれるということを成そうとしていたのです。

でも皆さん、私たちは彼以上に神様のみこころに完璧に従って、みこころに従うことをおのれの喜びとした人物がいたことを知っています。だれですか？それはもちろん、イエス・キリストです。そして興味深いことに、この詩篇40:6—8はヘブルの著者によってイエス様に当てはめてこのように語られているのです。ヘブル10章に飛んでいただいてヘブル10:4—7のところを読みますが、この詩篇の引用を5—7節に見て取ることができます。まず4節から見ていただくところ記されています。「:4 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。:5 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。:6 あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。:7 そこで私は言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについて記されているとおり、神よ、あなたのみこころを行うために。』」と。確かに、ここで詩篇のみことばが引用されていました。でも読んでいて一点だけ気になったかもしれません。5節の最後の部分で、詩篇では「あなたは私の耳を開いてくださいました。」となっているのが、ヘブルのほうでは「わたしのために、からだを造ってくださいました。」となっています。この違いについて説明することはいろいろできますが、ポイントを考えてみると、これら二つの表現は、結局は同じこと言っているのに過ぎません。先ほども言いましたが「わたしの耳」というのは、単に耳を表すのではなくて、その人自身が主に従うということを表していました。そしてここで、キリストが、「あなたは、…わたしのからだを造ってくださいました。」と言われたとき、主は父なる神様が用意されたそのからだを持って、みこころにすべて従っていくこと、また最後には完璧ないけにえとしてそのからだをささげられること、を言わんとしていたのです。ですから、どちらもその人自身をもって主に従うことを表していました。その意味で同じことばが使われているのです。でも、そのことを考えるときに、イエスはまさにそのとおりに生きられた人物でした。神の子羊としてこの地上に来られたイエス

様は、その生涯において、常に父なる神様のみこころに従われていました。どんなときも、そのみこころに従うことをおのれの喜びとして、そして、実に十字架の死にまでも従われて行ったのです。全焼のいけにえや罪のいけにえを含めて、どんないけにえも神様を完全に満足させることなどできませんでした。しかし、イエス様がみこころに従ってご自分のからだをただ一度だけいけにえとしてささげられました。そのことによって、私たちは聖なる者とされたのです。同じヘブルの中でもこのように言われています。ヘブル9：26「しかし、キリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。」ダビデは神様のみこころに従っていくことを喜びとして歩もうとしていました。みことばに従っていくことを、おのれの喜びとして歩もうとしていました。もしあなたが、これほどすばらしい救い主イエス・キリストを自分の主として今受け入れておられるなら、完璧にみこころに従ってご自分のいのちを捨ててくださったその方を個人的に知っておられるのならば、何よりも主のみこころに従うことを喜びとして歩まれたこの方に倣って、私たちも同じように歩んでことが大切だということです。私たち自身も、ダビデであれ、イエス・キリストであれ、主のみこころに従って歩いていくこと、主のみことばをおのれの喜びとして生きていくこと、そのことが求められていました。私たちはそのようなすばらしいみわざを成された神様のことをほめたたえながら、この方に心から従っていくことが大切になるのです。

3. 期待して主の助けを思い続けること 11-17節

そして最後三つ目にダビデのうちに見てとれる模範は、「期待して主の助けを思い続けること」です。立ち止まって考えてみると、ここまで、ダビデは主を待ち望んだ自分が過去に助け出されたことを感謝して、そして人々の前でそのすばらしい主の証を立てていました。過去に主に救い出されたという経験が、彼の心にあふれんばかりの喜びを、確信をもたらしていたのです。では、ダビデのうちから一切の困難が消えてしまったのかというと、そうではありませんでした。彼は今なお別の苦しみにおいて、いのちの危機に瀕していたのです。では、そんなときに彼は一体何をしたのでしょう？11節にこう記されています。「あなたは、【主】よ。私にあわれみを惜しまないでください。あなたの恵みと、あなたのみことが、絶えず私を見守るようにしてください。」と。ダビデがしたこと、それは、変わるもののない助け主である主の誠実な働きを期待して祈り続けることでした。ダビデはこれまでも、もう何度も何度も神様のあわれみというのを見てきました。あわれみによって救い出されたことが何度もありました。そのことに対して感謝もささげていました。でも同じあわれみが変わらずに自分に注がれることを願っていたのです。ダビデは過去を振り返ったときに、神様が確かに働いてくださったのだと、神様のあわれみを見たからこそ、変わらないそのお方が、変わらず自分をあわれんでくださることを求めています。

また、彼はあわれみを求めただけではなくて、自分の罪に対する赦しも何度も願っています。続く12節にこうありました。「数え切れないほどのわざわいが私を取り囲み、私の咎が私に追いついたので、私は見ることもできません。それは私の髪の毛よりも多く、私の心も私を見捨てました。」前々回、前回と見た詩篇38、39篇と同じように、ダビデは自分の罪深さというものをここで認めて、主の前に正直に告白していました。彼は、何度も何度も何度も自分の罪の赦しを主に求めていたのです。考えてみてください。信仰者として歩いていくその中にあって、こうして彼は、何度も何度も何度も罪の赦しを求めています。同時に、何度も何度も何度も人々の前で神様のことをほめたたえて良い知らせを述べ伝えていました。なんて偽善者なんだ、と皆さん思います？そうではありません。これが信仰者の歩みです。私たちもすでにキリストのみわざによって罪を赦されて義とされました。でも、ますますキリストに似た者になりたいと望むからこそ、罪を犯せばその罪を主に何度も何度も告白して赦しを求めるのです。でも同時に、私たちはその主にある赦しや、助けのすばらしさ、そういったものを味わうからこそ、何度も何度も忠実にこの主のすばらしさをほめたたえて生きていこうとするのです。罪の赦しを

求め続けることも、また同時に主のすばらしさをほめたたえ続けることも、ダビデにとっても私たちにとっても大切なことでした。

そして最後に、ダビデは主の助けを期待して、敵や苦しみやいろいろなものに取り囲まれる中から再び神様が引き上げてくださることを願っていました。このように13節から最後まで記されています。

「:13【主】よ。どうかみこころによって私を救い出してください。【主】よ。急いで、私を助けてください。:14 私のいのちを求め、滅ぼそうとする者どもが、みな恥を見、はずかしめを受けますように。私のわざわざを喜ぶ者どもが退き、卑しめられますように。:15 私を「あはは。」とあざ笑う者どもが、おのれの恥のために、色を失いますように。:16 あなたを慕い求める人がみな、あなたにあつて楽しみ、喜びますように。あなたの救いを愛する人たちが、「【主】をあがめよう。」と、いつも言いますように。:17 私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。」こうしてダビデは一度だけではありません。何度も何度も何度も何度も主を待ち望んでいました。その度に、神様の変わらない愛を求め続けていたのです。

きょうこの詩篇40篇を通して見てきて、ある一つのサイクルを見て取ることができました。どんなものだったか？ダビデは切実に主を待ち望んでいました。すると、誠実な主はその祈りに答えられ、助けを与えられました。そのことをダビデは心から感謝して、そのすばらしさを自分だけではなくて人々の前で賛美としてささげていました。そして、神様は確かに救いを与えてくださると確信を強めた彼は、そのことを良い知らせとして人々に述べ伝えていました。また、ダビデは大きな苦難に直面しました。だからこそ、彼は主を待ち望み続けていました。主が助けてくださったらそのことを感謝して…。このようにダビデは主を待ち望む者として歩み続けていました。そして、その歩みを通して彼は、何よりも自分の信頼する神様は待ち望む者に答えてくださるお方なのだと、ますます学び続けていたのです。

果たして私たちは神を待ち望む者として成長しているでしょうか？皆さん、私たちは待ち望むことのすばらしさをより味わう者として変えられているでしょうか？偉大な主を覚えて、その方の働きを、黙って待てるというのは、私たちにとってすばらしいことです。ダビデはそのようにして生きてきました。私たちも主の働きを思い返して、変わらない主のご性質に思いを巡らして、期待して、主の助けを思い続けながら、主を待ち望む者としてともに成長していきましょう。